

+ 3 4 【つまらん】

お使いの帰り道、躑躅峠（つつじとうげ）の薄暗い黄昏時（たそがれどき）、むこうからやってくる一人の老人にであいました。

身なりや容貌（ようぼう）は、懐爺にそっくりなので、あえて記しません。

はじめぼくは、懐爺かとおもって声をかけたのです。

「こんなところで、なにをしているんじゃ」

「なにをしてもつまらん、なにを見てもつまらん」

そう老人はいいました。

その声で、懐爺ではないことがわかりました。

懐爺は、こんなに暗い声はだしません。

懐爺は、つまらんなんていいません。

「わしはなにをしてもおもしろいのう。なにをみてもおもしろいのう」

ぼくはからかい半分でもいいました。

「つまらん、つまらん。面白いなぞというやつもつまらん」

頭にきたので、

「わしはおつかいだって、おもしろいぞ。いろんなくさばながみられるし、いろんなとりやむしの、こえもきけるでろう」

「そんなものはつまらん。もう百年も見てきたしきいてきた。なんの風情（ふぜい）もありはせん」

ますます頭にきたので、

「そらあ、かんかくというもんが、にぶって来たせいじゃろ。としはとりたくないもんじゃ」

「生意気な小僧め。おまえのおっかさんの顔を見たいものだ」

「わしのおっかさんのかおも、おもしろいぞ。わらったり、ないたり、おこったり、へんかがあるでろう」

「おまえがいたいのは、人間もそして季節も変化があるから、面白いということだろ。それはただ気づくというだけのものだ。おまえは面白いという概念（がいねん）をしらないから、そんなつまらんことをいうのだ」

老人もむきになりかけています。

「がいこつならよくしつとる。がいこつもおもしろいのう。みていてあきないのう」

「骸骨ではない、概念。おまえは生意気に加えて莫迦（ばか）だから、なにもわかってはいないのだ」

生意気はしかたないとしても、莫迦とはゆるせん。

「わしはりこうもので、とおつとる。おじいさんは、わしのことなんもしらんで、いかげんなこというでない」

ここで老人は薄ら笑いをした。

ますます莫迦にされている気がしました。

「自分を利口だとおもっているやつほど、莫迦なやつはおらん。おまえは周りに莫迦だなんていわれたことがないから、自分が莫迦であることに気づかない。つまらん小僧だ。つまらんつまらん」

「ならば、おじいさんは、なにがおもしろいんじゃ」

「この世に面白いことなぞ何もない」

「ならば、しねばよいのう」

「莫迦に莫迦が付いた大莫迦者め。死にたくとも死ぬことができないから、つまらんのだ」

「いみがわからん。なにがつまらんのかもわからん」

「おまえは莫迦だから、ひとつ例をだそう。こうして莫迦な小僧と会話して、面白いわけがあるまい」

頭が爆発しそうでした。

「かいじいは、ばかばかいうやつが、ほんとのばかだというとった」

「そのじいさんも莫迦だ。生意気な小僧とつきあうなんて、こんな莫迦な話はない」

「なまいきなこぞうを、おもしろいとかんじないおじいさんは、りょうけんがせまいのう」

「料簡ときたか。そういう言葉もつまらん。もっと新しい面白い言葉はないのかい」

「あたらしいくにへ、いけばいいじゃろ」

「莫迦は死んでもなおらんな。新しい国に行きたくとも行けないから、つまらんのだ。行けるもんなら土星に行きたい」

ああいえばこういう老人だ。

ぼくは業を煮やしました。

それで老人の口真似（くちまね）をして、
「そうつまらんつまらんばかり、くちばしるから、つまらんのだ」
と試してみました。

老人は気分を害した様子で、歩きだしました。

ぼくはその背中を追って、
「たまには、おもしろいおもしろい、いうてみろ」
「つまらんつまらん、面白いいうてもつまらん」

老人はとても頑固（がんこ）でした。

ぼくの帰りは、老人の行く方向とは逆なので、それ以上追いかけるのはやめました。

つまらんつまらん
やっぱりつまらん
どうにもつまらん
つまらんづくしだ
この世はつまらん
あの世もつまらん
人生などつまらん
仕事などつまらん
恋愛などつまらん
結婚などつまらん
葬式などつまらん
こどもはつまらん
おとなもつまらん
おとこはつまらん
おんなもつまらん
音楽なぞつまらん
文学なぞつまらん
絵画なぞつまらん
つまらんづくしだ
どうにもつまらん

やっぱりつまらん
つまらんつまらん

老人は呟いたり、わめいたり、歌ったりしながら、ちょうど立ってきた濃霧（のうむ）の闇に消えて行きました。

後日、この話を懐爺にしました。

「わしのことを、なまいきだのばかだのって、けしからんおじいさんで
のう」

もう頭は普通になっていました。

「それは【つまらん】ですよ」

「あのおじいさんはおばけかい。おばけならしかたないのう」

「おばけには、おばけっぽいおばけと、おばけっぽくないおばけと、半
分半分ですからねえ。【つまらん】は、おばけっぽくないおばけの代表
です」

「なぜにああも、つまらん、いうのかのう。わしはみみに、いか、じゃ
のうて、たこができたぞい」

「つまらんと口にするということは、面白いことはないか、と希求（き
きゅう）することと同じです。だから金ちゃんのことを、生意気だの莫
迦だのといっって、からかうのも面白いこと探しのひとつなのでしょう」

「からかわれてはおらん、おじいさんはきっとほんねをいったんじゃ」

口惜しいけれども、冷静になってみると、そうおもわれました。

「それなら本音をいえる相手と出会ったことが、面白いこと探しのひと
つだったのです。【つまらん】はつまり、好奇心（こうきしん）のおば
けですからね」

「それで【つまらん】は、まんぞくしたのかのう」

「さあそれは。【つまらん】は満足したことの無いおばけですから」

「それはどうしてかのう」

「そうですね。金ちゃんは漫画や絵本を見て、面白いとかんじるでしょ
う。たまに小学校で催してくれる映画会や演奏会だって、つまらないも
のなんかないでしょう。けれども【つまらん】は目や耳や鼻が、という
より、頭が肥えているのです。ちっとやそつとのものでは、感動をしな

い。もっとすばらしいものがあるはずだと、高いところを見えています。

【つまらん】だってこどものころは、つまらないこともなかったはずで
す。けれどもおとなになるにつれて、あるいは老人になって、なんだこ
んなものを自分は面白がっていたのかと、莫迦らしくなるんです。ひと
くちでいって、勉強のしすぎでそうなります。【つまらん】はつまり、
芸作家のおぼけでもあるんです。芸作家は高みを希求しますから、世俗
(せぞく)の面白がるものなんか、みんなつまらないんですね」

「そうかい。げいじゅつかは、つまらんのう」

「はい。つまらんつまらんいうのは、おぼけだけではありません。正宗
白鳥はそれが口癖です」

「はくちょうが、しゃべるんか」

「偉い文学者の白鳥です。白鳥は人生は優勝劣敗(ゆうしょうれっぱい)
といました。弱肉強食(じゃくにくきょうしょく)に近いですね。そ
ういう人生に飽き飽きしていたのかもしれない。それが劣勝優敗や強
肉弱食なら面白いのかというと、それはそれでけしからんということ
ですから、厄介(やっかい)です。偏屈(へんくつ)なんでしょうが、そ
の偏屈になにか真実が隠されている気がします。つまらんつまらんと呟
きながら、老いてもよく読みよく観て、よく出かけました」

「【つまらん】はかいじいに、よくにとった。かいじいも、あれこれ、
つまらんおもうとるのかのう」

「人生は本来つまらないものです。ですから、つまらない人生をすこし
でも面白く生きることが、人間の大切な日々のいとなみではないでしょ
うか。ついでにいいますが、空腹(くうふく)のときに、はらへったは
らへったというのは、まだかなり余裕(よゆう)があるからなんで、ま
ことに空腹のときは、はらへったなんていうこともできないでしょう。
つまらんつまらんも、それと同じところがあります」

「かいじいのじんせいは、おもしろいか、つまらんか」

懐翁は悩むかとおもいきや、即答しました。

「面白いですよ。じつはつまらんことばかりの人生でしたが、こうして
金ちゃんと仲良くなって、面白いことばかりの人生になりました。長生
きはするもんです。金ちゃんに感謝です」

「ほんまかのう」

ぼくは嬉しかった。

そういわれてますます懐爺が大好きになりました。

長生きしたせいで、つまらんことばかりの老人もいれば、長生きした
おかげで、面白いことばかりの老人もいる。

人生は謎（なぞ）だ。

謎の人生に、おばけがでてくるのは、当たり前なのかもしれない。

そんなことをなんとなくかんがえていました。